

## 論文

# ノルウェー王国における心理士養成課程 －オスロ大学の養成カリキュラムを中心に－

佐藤俊彦<sup>\*1</sup>

**要旨：** ノルウェー王国における心理学資格（心理士，英語でpsychologist，ノルウェー語でpsykolog）と，オスロ大学社会科学部における，その養成課程とを紹介した。心理士を取得しようとするオスロ大学の学生は，社会科学部心理学科に設置された6年間の課程を修了しなくてはならない。この教育課程に関しては，日本の心理学関連の資格制度と比較した場合，1) 国の法制度で規定されている，2) 大学入学時から6年間のカリキュラムを修了しなくてはならない，3) 心理学の基礎領域，特に人間行動の生物学的基礎を学ぶ科目が必修化されている，4) 最終年度に研究論文の作成を課しているといった特徴がみられる。ノルウェーの資格制度は将来的に，ヨーロッパ心理学会連合（EFPA）による職能資格制度EuroPsyの枠組みに準拠していくと見られる。

**キーワード：**心理学，資格，ノルウェー，オスロ大学，EuroPsy

## 1. はじめに

### 1.1. 意外なできごと

筆者は2008年8月から9月にかけて3週間にわたりノルウェー王国の首都オスロに滞在し（図1），オスロ大学医学部にて共同研究に従事した。筆者が所属していた生理学科の研究室は，「注意欠陥多動性障害」（Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder, ADHD; American Psychiatric

Association, Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 4th ed., text revision, 2000)と診断された子どもたちを対象にした学習行動の研究を行う一方で，ADHDの動物モデルを利用したオペラント条件づけの動物実験を行っていた。

筆者がオスロに到着して間もない8月中旬は，夏休みということもあって，研究室の周辺だけでなく，キャンパス全体が閑散

<sup>\*1</sup>東北文化学園大学医療福祉学部

## ノルウェーの心理士養成課程

とした様子であった。だが、8月も下旬になると、新しい秋学期が始まり、夏休みを終えた学生たちが研究室を訪れるようになった。そんなある日のことである。3名ほどの学生が研究室を訪れ、教授室にて、教授および研究員と打ち合わせをしていた。筆者は教授室の隣の部屋で仕事をしていて、教授室のドアはつねに開放されていたこともあって、話し声はよく聞こえる。教授はふだん、筆者には英語で話しかけてくれるものの、ノルウェー人同士で話すときはノルウェー語で会話している。このときも学生たちとノルウェー語で話しているらしく、具体的な内容は、筆者にはさっぱりわからなかった。2時間くらいもかけた打ち合わせであったが、学生たちも熱心な

のか、教授にいろいろと質問している様子であった。その打ち合わせが終わって、学生たちが帰ってから、研究員にどんな打ち合わせをしたのか聞いてみた。打ち合わせに参加していたみなさんがずいぶん熱心だったので、興味を引かれたのである。その会話の内容は、おおむね以下のようなものであったと思う。

筆者「さっき来た学生たちは医学部の学生かい？」

研究員「いや違う、心理学科の学生だ」

筆者「へえ、他学部から卒業論文のために来るんだね」

研究員「違う、彼女たちは心理士になるための論文を書くんだ。卒業論文じゃない」



図1 筆者がオスロ滞在中に利用した大学宿舎。オスロ大学のキャンパスの中にある。

筆者「心理士？それって臨床心理学の資格のこと？」

研究員「まあそんなところだ」

筆者「卒論じゃないということは、ああ、臨床心理学の修論？」

研究員「違う、マスターじゃない」

筆者（卒論でも修論でもないという意味が理解できないので話題を変える）「ふーん、臨床ということは、ADHDの子どもの研究するんでしょ？」

研究員「いや違う、ラットの研究だ」

筆者（驚きのあまり叫ぶ）「なんで臨床心理士が動物実験やるんだ？」

研究員「この国の心理学教育では、基礎と臨床が分かれていないんだ」

筆者（しばし絶句した後）「この国の臨床心理士の養成は、どうなっているんだ？」

## 1.2. 本論で扱う問題

上述の会話の中で、筆者が疑問を感じ、強く関心を持ったのは以下の2点である。

1. カウンセリングや心理療法、心理検査といった臨床心理学的業務に従事する国資格「心理士」（英語でpsychologist、ノルウェー語でpsykolog）の養成課程は、学士課程でもなければ修士課程でもない独自の教育課程であるということ。

2. 臨床心理学の資格を取ろうとする心理学の学生たちが、課程修了のための論文作成を目的として、医学部までやってきて動物実験をやろうとしている。

第一の疑問点に関連して、本論の中では、

この心理士の養成課程を紹介したい。その中で、ノルウェーの高等教育における学士や修士といった学位制度の枠組みについても簡単に紹介する。ヨーロッパ諸国では近年、ボローニャ・プロセスと呼ばれる学位制度についての改革が行われてきており、ノルウェーでも同様の改革が進められてきた。この改革についても簡単に紹介しておきたい。

また、第二の点について、この事実から強く印象づけられたことは、オスロ大学における臨床心理学の教育において、心理学の基礎領域の知識の習得が重視される傾向があるらしいということである。それは、後述する心理士資格の養成カリキュラムの内容にも顕著に表れている。臨床心理学を専攻している学生たちが、課程を修了するための最終論文のテーマとして、なぜ動物実験を選んだのかといったことは、もちろん、ご本人たちに聞いてみないと分からないことではある。しかしながら、臨床心理学のカリキュラムの中で、研究テーマに動物実験を選択できるということは、その教育カリキュラムの中で、心理学の基礎領域に関する知識、ないし心理学の科学的研究法に関する知識と技法の習得が重要視されているということ（少なくとも、軽視されていないということ）を意味するのだろう。本論では、筆者がこれまでに得た資料を参照しながら、ノルウェーの心理士養成の特徴について概観し、心理学の基礎領域に関する授業科目がどのように位置づけられているかを考察してみたい。さらに、わが国の代表的な心理学資格のカリキュラムとの比較を通して、オスロ大学の心理士養成課

## ノルウェーの心理士養成課程

程の特色を指摘したい<sup>注1)</sup>。

そして、ノルウェーという国は、多くの読者にとって、あまり馴染みのない国であるかもしれない。そこで、ノルウェーの心理士養成課程について述べる前に、ノルウェーの国家や社会の現状と、これまで民族がたどってきた歴史とを、簡単に紹介しておきたい。後述するノルウェーの心理士制度は、国資格であり、法制度で規定されている。その国の歴史的背景や現在の社会的状況についての知識は、この法制度を支える社会的基盤を理解するのに役立つと思われる。それと合わせて、本論ではオスロ大学における心理士養成課程を紹介するので、この養成課程を紹介するのに先立ち、この大学の概略についても述べておきたい。

## 2 ノルウェー王国とオスロ大学

### 2.1. ノルウェー王国<sup>注2)</sup>

#### 地理的位置と気候条件

ノルウェー王国（以下、ノルウェーと記す）は、ヨーロッパの北方、スカンジナビア半島の中央に伸びるスカンジナビア山脈の北西に位置している。日本と同様に細長い国土であり、北端から南端までは約1,700 kmある。国土の面積は385,199 km<sup>2</sup>であり、日本とほぼ同程度である。その国土の北部は北極圏に含まれる。これほど北にありながら、メキシコ湾流という暖流がノルウェー沿岸を通っており、緯度のわりに比較的温暖な気候である。国土が南北に長いと、北部と南部、沿岸部と山間部との間で気候に差異がある。首都オスロは国土の南方に位置し、北緯60度付近にある。これと同等の緯度の地点を東アジアで求める

と、カムチャッカ半島北部に相当する。オスロの平均気温を見ると、7月がもっとも高く16.4℃、1月がもっとも低くマイナス4.3℃である。この1月の平均気温は、札幌のマイナス4.1℃（気象庁、2008）と同等である。沿岸部では、フィヨルドと呼ばれる入り組んだ海岸線が続き、オスロもそうしたフィヨルドの奥にある（図2）。

#### 社会・産業・経済

立憲君主制の王国である。ノルウェーの国土の面積は日本とほぼ同等である一方、総人口が2007年1月現在で約473万人であり、人口密度は1平方キロあたり12.1人となっており、日本よりもはるかに低い。公用語はノルウェー語である。その一方で、筆者の経験した範囲では、大学関係者に限らず、多くの人は英語を話すことができるようである。しかも、英語に妙な訛りもないようで、非常に聞き取りやすかった。筆者の知人によれば、ノルウェーでは、英語は小学校2年生から習うとのことである。

ノルウェー社会の特徴として、他の北欧諸国と同様、高福祉社会であるという点を指摘できる。1948年に「ノルウェー版ビヴァレッジ計画」と呼ばれる包括的社会保障制度の構想ができていた。次いで50年代から60年代にかけて、国民一人当たりの社会保障関連支出を引き上げていった。60年代には、「自ら扶ける者を扶ける」という理念の下に、身体障害者や寡婦などに就業のための訓練や教育の施設を作った。その後、80年代には石油価格の暴落などの影響で、銀行の倒産などの経済危機に直面したものの、社会保障への高額の支出が現在

まで行われている(百瀬, 1980; 百瀬・塩屋・村井他, 1998)。最近の情勢について見ると、ノルウェー政府の2006年の社会保障関連の歳出額は、2887億ノルウェークローネ<sup>注3)</sup>、日本円に換算すると3兆6788億円に相当する(2008年12月7日現在の相場による換算)。日本の社会保障関連の歳出額は2008年度の当初予算で21兆7824億円であるから(財務省, 2008)、金額としては日本のほうが約15倍である。しかしながら、人口では日本のほうが約30倍多いわけであるから、国民一人当たりの金額は、単純に考えて、ノルウェーのほうが2倍程度大きいということになる。歳出全体における社会保障関連の比率を見ると、日本の2008年

度予算で約26%であるのに対して、ノルウェーでは42%である。

他方、産業については、伝統的に海運業や漁業が盛んで、捕鯨も行っている。造船業、林業、パルプ、紙工業も行われてきた(松村, 1996; 武田, 1993)。ノルウェーの社会経済的条件の中でも特に重要な要素は、この国が世界有数の産油国だということである。2006年の統計では、ヨーロッパにおける産油量では、ロシアに次いで第2位、世界全体で見ても第10位であった。1960年代に、北海で油田が発見され、ノルウェーは1971年から石油の生産を開始した。開発初期には、フィリップ社などの外国の石油会社が主要な役割を果たしていた



図2 オスロの港(フェリー発着場)とオスロ湾  
港に面したオスロ市庁舎から撮影。遠方にオスロ湾の入り組んだ海岸線が見渡せる。

## ノルウェーの心理士養成課程

ものの、次第にノルウェーの国営企業および民間企業が中心になった。ノルウェーの石油と天然ガスは、イギリス、フランス、ドイツなど、ヨーロッパ諸国にパイプラインで輸送されている（吉武, 1996）。この石油産業が、ノルウェーの経済の中心となっているといっても過言ではないようだ。2006年の国内総生産（GDP）が2兆1558億ノルウェークローネであり、石油および天然ガス関連産業の生産額がそのほぼ4分の1を占めている。2006年の時点で、国家予算における石油関連の収入が3547億ノルウェークローネであり、これは2006年の歳入全体の約3分の1に相当する。この石油関連の収入額は、上述の社会保障関連支出を大きく上回っていることにも注目したい。

こうした事実からすれば、石油産業に下支えされた高福祉国家という位置づけが可能であるかもしれない。ただし、その石油資源は、21世紀中に枯渇するとの指摘もあった。ある資料（渡部, 2006）によれば、ノルウェー、イギリス、デンマークの北海油田において今後採掘可能な年数は、いずれも10年以下であるという。採掘年数の推定値については、資料によっても異なるようで、より楽観的な予測を述べた資料もあるものの、いずれにせよ、石油が出なくなった後に、ノルウェーがはたして高水準の社会保障制度を維持できるのかどうかはきわめて重要な問題である<sup>注4)</sup>。実際、ノルウェーでは、石油産業に依存する経済体制からの脱却が重要な課題になっており、1995年時点でのノルウェー健康・社会問題省による「社会保障白書」には、石油関連収入が減少しても、社会保障制度を崩壊さ

せないよう努めるという問題意識がすでにみられた（上掛, 1999）。これはノルウェーの心理学にとっても大きな問題となる可能性があり、後述する心理士資格の制度も、国家による制度の一環として存在している以上、国家財政の逼迫が起これば、その制度自体が現状からの転換を迫られる可能性もあるといえよう。

## 歴史<sup>注5)</sup>

ノルウェーの国家としての歴史は、9世紀末まで遡ることができる。ノルウェーは793年以後、ヴァイキング活動を行っていた。北欧の王権は、ヴァイキング活動を指揮していた豪族が軍事的勢力を強めていく中で形成された。同じく北欧に位置するスウェーデンの国名が「スヴェア人の支配領域」を、デンマークが「デー人の国」を意味するのに対して、ノルウェーとは「北方の道」を意味していた。すなわち、その国名は、特定の民族名ではなく、スカンジナビア半島北西側の沿岸地域を指す言葉に由来している。当時の王権は、租税ではなく、対外的な略奪や交易、すなわちヴァイキング活動に依存していた。このヴァイキング時代は、1000年ごろまで続いたとされる。

ヴァイキング時代に限ってみれば、ノルウェーにとって、他の北欧2国、すなわちデンマークとスウェーデンに劣らず活発な時代であった。歴史上最初のヴァイキングによる略奪は、ノルウェーによるものであった。イングランドやアイルランドに遠征するだけでなく、アイスランドやグリーンランドに植民し、ついにはコロンブスよ

り500年ほど早く、西暦1000年ごろにアメリカ大陸に到達したとされている。

ノルウェーは、ヴァイキング時代が終わった後、他の北欧2国に比べて、ヨーロッパ史の中で比較的影が薄い印象を受ける。他の2国は、ヨーロッパの強国として、ヴァイキング活動の終息以後にも、ヨーロッパ史の表舞台にたびたび登場した。これに対して、ノルウェーはヴァイキング時代が終わると、さほど目立った歴史的事跡を残していない。これは他国の支配を受けた時期が長かったためでもある。ヴァイキング時代の後、14世紀半ばに黒死病による甚大な被害を受けて国力が衰退した。黒死病により、北欧人口の3分の1が失われ、なかでもノルウェーは被害が大きく、その人口の半分が失われたという。1380年にはデンマークとの同君連合に移行し、1536年には、さらにその地位が低下して、デンマークの属州となった。そのデンマークによる長期支配の転換点となったのはナポレオン戦争であった。デンマークがナポレオン側に味方して敗北すると、1814年のキール条約で、属州であったノルウェーがスウェーデンへ譲渡されることとなり、ノルウェーはスウェーデンとの同君連合へと移行した。同君連合というと、形式上は対等の関係であるかのような印象を受けるものの、このときのノルウェーには、他国と独自に外交を行う権限を与えられていなかった。独自の王を擁立できたのは1905年である。1905年にデンマーク王室より王子を招いて国王とするが、これはノルウェーにとって525年ぶりの固有の国王の即位であった。完全な独立を達成してから今日ま

で100年程度しか経過していない。その首都オスロも、1925年までの300年ほどの間は、デンマーク王クリスチャン4世の名をとった「クリスチャニア」という名称で呼ばれていた。

こうした歴史的状況は、教育制度の整備にも深刻な影響を与えたようである。大学の設立について、デンマークの首都コペンハーゲンには1479年、スウェーデンの古都ウプサラには1477年に大学が創立されたのに対して、ノルウェーの最初の大学であるオスロ大学は、後述するように、1811年に創立されており、他の2国より300年以上も遅かった。

## 2.2. オスロ大学<sup>注6)</sup>

### 大学の概要

オスロ大学 (University of Oslo) は、首都オスロにある国立の大学である (図3)。現在、その運営資金は国が出資している。ノルウェーには総合大学が6つあり、その中でオスロ大学はもっとも歴史が古く、規模も最大である (駐日ノルウェー王国大使館, 2008)。オスロ大学以外の総合大学として、ベルゲン大学、トロンハイムにあるノルウェー科学技術大学 (NTNU)、トロムソ大学、スタヴァンゲル大学、オースにあるノルウェー生命科学大学 (UMB) がある。

オスロ大学は、1811年、ノルウェーがまだデンマークの統治下にあった折に設立された。これまでに4人のノーベル賞受賞者を輩出しており、その内訳は経済学賞2名、物理学賞1名、化学賞1名である。現在の学生数はおよそ30,000人、教職員は4,500人である。

### 学位制度

大学の組織について述べる前に、ノルウェーの大学における学位の制度を紹介しておきたい。ノルウェーにおいては、ボローニャ・プロセスに基づく学位制度改革が行われてきた。ボローニャ・プロセスとは、1999年6月に、ヨーロッパ29カ国が署名した「ボローニャ宣言」の内容の実現に向けた一連の取り組みの過程である（木戸, 2008）。このプロセスの目的を平易に述べれば、ヨーロッパ諸国における大学教育の共通基準を設けて、他国の大学で学ぶ場合にも、それまでの取得単位等を一定の

基準で評価できるようにするものである。ここでの共通基準の根幹は、第一に、学士、修士などの学位制度の共通化、第二に、単位制度の共通化、第三に、教育内容の質的保証である。その目指すところは、学生がヨーロッパ諸国の大学の間を自由に移動し、どの大学で学んでも共通の学位や資格を得られるということである。

この教育制度改革の結果、ノルウェーの大学では、2003年以後、このボローニャ・プロセスに対応した学位制度が確立されている。この制度では、学士課程と修士課程とを基本としながら、他方で5～6年の職



図3 オスロ大学の旧キャンパス

1852年に建造された。現在は法学部などの一部の組織が使っている。オスロ市中心部の王宮や国立劇場に近く、目抜き通り（Karl Johans gate）沿いにある。右手奥の銅像は、ノルウェーを代表する画家のムンク（Edvard Munch）である。



業学位・資格の課程が並行して存在する。後述する心理士の課程は、後者に相当する。オスロ大学の心理学科の場合、3年間の学士課程、2年間の修士課程とは別に、5ないし6年の心理士資格の課程がある。学士課程では180単位、修士課程で120単位、6年制の心理士資格課程で360単位が必要である。ここでいう単位とは、ボローニャ・プロセスで規定される欧州単位互換制度 (European Credit Transfer and Accumulation System, ECTS) に従うもので、1学年当たりの学習内容を60単位と定めている。

#### 学部構成

発足当初は4学部体制であったものが

200年近い歴史の中で規模の拡大と発展を遂げ、現在では、神学部 (Faculty of Theology), 法学部 (Faculty of Law), 医学部 (Faculty of Medicine), 人文科学部 (Faculty of Humanities), 数理科学部 (Faculty of Mathematics and Natural Sciences), 歯学部 (Faculty of Dentistry), 社会科学部 (Faculty of Social Sciences), 教育学部 (Faculty of Education) の8学部体制である。後述するように、医学部には5つの付属病院がある。また、付属の博物館として、自然史博物館 (The Natural History Museums and Botanical Garden), 歴史博物館 (The Historical Museum), ヴァイキング船博物館 (The Viking Ship Museum at Bygdøy) がある。



図4 オスロ大学医学部 (Domus Medica)

### 社会科学部

心理学科の属する社会科学部については、1963年に設立され、現在は6000人程度の学生を有する。ノーベル賞の受賞者を2名出した名門である。学部内の学科構成は、社会学・人文地理学科、政策科学科、心理学科、社会人類学科、経済学科の5学科から成る。また、中核的研究拠点（Center of Excellence, COE）として「公平性、社会組織および勤務成績」（Centre of Equality, Social Organization, and Performance, ESOP）などの研究組織を有する。

### 医学部

心理学の教育カリキュラムを紹介する前に、筆者が客員研究員として所属した医学

部についても紹介しておきたい(図4)。心理学の臨床活動とも関連の深い学部であり、本論の冒頭で述べたとおり、心理学科との間で、学生やスタッフの人的な交流もある。

ノルウェー大学の医学部は、ノルウェー国内における最大規模の医学教育機関である。神経生物学、移植免疫学、栄養学、癌研究といった領域で国際的に高い評価を得ている。その研究教育の領域は、細胞生物学のような基礎研究から臨床研究まで幅広いものになっている。5つの研究所と5つの付属病院、ならびに3つのCOE組織を有する。研究所には、「一般診療・地域医療」（General Practice and Community Medicine）、「健康管理・健康経済」（Health Management and Health Economics）



図5 医学部に隣接した付属病院（Rikshospitalet）

「基礎医科学」(Basic Medical Sciences), 「精神医学」(Psychiatry), 「看護・健康科学」(Nursing and Health Sciences)の5つがある。これに加えて, ノルウェー国立病院(ノルウェー語でRikshospitalet, 図5)を筆頭に5つの付属病院がある。COE組織としては, 「分子生物学・神経科学」(Molecular Biology and Neuroscience), 「免疫制御」(Immunity Regulation), 「癌生物臨床医学」(Cancer Biomedicine)の3つである。

筆者が所属した生理学科(Department of Physiology)は, 上述の研究所のうちの基礎医科学研究所(Institute of Basic Medical Sciences)に属しており, この研究所には他に, 解剖(Anatomy), 栄養(Nutrition), 医療行動科学(Behavioral Sciences in Medicine), 生化学(Biochemistry), 生物統計(Biostatistics)の各学科がある。

生理学科には, 10名の教授と2名の准教授がいる。この中で, 筆者が世話になったのがSagvolden教授である。彼はこれまでにADHDの動物モデルを利用した行動神経科学の基礎研究を行いながら, 他方でADHDの子どもたちを対象にして, 行動分析学ないし学習心理学的な研究を行っている。現在, ノルウェー神経科学会の理事長を務めており, アフリカADHD研究ネットワーク[African Research Network on Attention-Deficit/ Hyperactivity Disorder (ADHD) and Related Health Problems, AfriADHD]の代表者でもある。その肩書から推察されたとおり, ADHDの行動的問題に対して, 基礎研究と臨床的支

援の双方の活動を精力的に行っている。今回, 筆者がオスロに滞在した際の研究テーマも, ADHDの児童の学習行動に関するものであった。その一方で, Sagvolden教授と筆者との交流が始まったのは, 基礎領域の研究テーマで, 彼と筆者とが非常に近い仕事をしていたことがきっかけであった。

ここまでは, ノルウェー王国という国家, ならびにオスロ大学という高等教育機関の概略について述べてきた。これまで述べてきた内容を踏まえて考えれば, オスロ大学は, 石油産業に下支えされた福祉国家における, 最大規模の最高学府ということになるだろう。このオスロ大学において, どのような心理学教育が行われているのだろうか。ここで章を改め, この大学の心理学教育課程について紹介することとしたい。

### 3. オスロ大学の心理学教育課程<sup>注7)</sup>

#### 3.1. 心理学科の概要

##### スタッフ

心理学科は, オスロ大学のBlindernキャンパスの中にある(図6)。スタッフの人数であるが, 教授(Professor)の人数が39名であり, そのうち兼任教授(Professor II)が5名である。准教授(Førsteamanuensis)25名, 大学講師(Universitetslektor)9名, 上席研究員(Seniorforsker)1名, 研究員(Forsker)が3名, ポスドク研究員(Postdoktor)が8名, 大学院奨学生46名となっている。この数字には休職(Permisjon)中のスタッフも含んでいる。

### 研究領域

研究領域としては、「臨床心理学」、「社会心理学」、「精神病理学・パーソナリティ」、「職業・組織心理学」、「発達心理学」、「健康心理学」の6つの領域とともに、「認知研究センター」(Center for the Study of Human Cognition)および「認知発達研究ユニット」(The Cognitive Developmental Research Unit, Larger Priority Programs)を有する。実験心理学の部門として、認知研究センターがその教育研究の役割を担っているようである。

### 外部評価

以上はオスロ大学のホームページの情報に基づくものであり、心理学科内部から発信された資料である。その一方で、心理学科の組織に関する外部からの評価資料として、ノルウェー学術会議が2004年に発表した評価報告書(Nilsson et al., 2004)がある。これには、この心理学科における臨床心理学の部門について厳しいコメントがいくつか付されていた。例えば「教育と流動性」という項目では、ほとんどの教授がオスロ大学の出身であり、外国からスタッフを募集しようとする努力に欠けると指摘さ



図6 オスロ大学社会科学部心理学科

知人が心理学科の前まで案内してくれた。到着して「ここが心理学だ」と言われたとき、道沿いに3つほどの建物が並んでいたので、「どの建物が心理学ですか？」と尋ねたところ、「この並びの建物全部だ」とのことであった。これに隣接して精神病院がある。

れている。また、「学術的な水準と重要性」では、伝統的なテーマで、一部の研究は時代遅れであり、意義がないとは言えないものの、将来展望と積極性に欠ける、少数のテーマの下に研究を統合して、重要事項を集中的に扱うべきである、「総合評価」にあっては、教育と臨床業務に多くの時間を費やしている、こうした状況における問題として、多くのデータが集まっているのに、それを分析するための計画と方向性がない、海外からの人材登用を行うべきである、といった具合に辛辣なことが書かれている。このように海外からの人材登用について厳しい意見が付されたことについては、後述するように、欧州連合（EU）内で、人材の流動性を高めようとする動きがあることにも関連していると思われる。

### 3.2. 教育課程

学士課程（The Bachelor's programme）、修士課程（The Master's programme）、ならびにPhD課程（Programme for the Degree of PhD）がある。これらの課程とは別に、心理職養成課程（Professional Programme in Psychology）がある。このうち、学士課程は3年制で、卒業には180単位を必要とし、収容定員が120名である。修士課程は2年制で、修了するために120単位が必要であり、収容定員が55名である。

他方、本論にて紹介する心理職（心理士）の養成課程は、5年制または6年制とされているが、これは5年制の旧カリキュラムと、6年制の新カリキュラムの移行期にあるためのようだ。定員は学期ごとに44名である。筆者の知人によれば、医学部の医

師養成コースと同等の人気があり、たいへんな狭き門であるらしい。修得単位数は5年制で300単位、6年制で360単位である。そのカリキュラムの内容を表1に示す。

このカリキュラムの特徴を大雑把に言えば、基礎中心の学習から臨床中心の学習へと段階的に移行していく過程である。筆者の知人が、「この国の心理学では基礎と臨床を区別しない」と述べていたとおり、基礎領域の学習を、臨床同様に重視した内容になっていると感じる。より具体的に述べれば、1年目には、概論および心理学の科学的基礎を学ぶ。この中には研究法に関する入門科目（研究法入門, Innføring i metode）も含まれる。2年目には、人間の意識や行動の基礎となる認知過程（認知心理学, Kognitiv psykologi; 応用認知心理学 Anvendt kognitiv psykologi）や、意識と行動の神経生物学的基礎に関連した科目（認知神経科学, Kognitiv nevrotenskap; 神経生物学・神経解剖学, Nevrobiologi og nevroanatomi）を学ぶ。この学年からは課題研究（Prosjekt）も含まれる。3年目には、発達心理学や社会心理学に関する基礎を学ぶ（発達心理学, Utviklingspsykologi; コミュニケーションと学習, Kommunikasjon og læring; 応用社会心理学, Anvendt sosialpsykologi）。課程の後半に入った4年目には、アセスメントと心理療法の基礎を学び（心理査定法, Diagnostikk og diagnostiske øvelser; 心理療法と臨床研究, Psykologisk behandling og behandlingsforskning）、実習（予備実習, Forpraksis）も始まる。5年目には臨床心理学的事項を継続して学びながら、本格的

## ノルウェーの心理士養成課程

な実習（基礎実習, Hovedpraksis) に入っていく。最終年度の6年目には、主として論文指導（Hovedoppgave）と実習（臨床実習, Praktikum）とを1年間継続する。このカリキュラム全体を見渡したときに、3年次までの基礎領域の心理学教育の上に、4年次以後、臨床心理学の知識と技法の教育を積み上げていくという基本方針を明確に読み取ることが可能である。

### 3.3. 取得できる資格と法制度

この養成課程を修了することによって、心理士（英語でpsychologist, ノルウェー語でpsykolog）を取得することができる。この資格の認定については、医師や歯科医師、看護師などとともに、ノルウェーの医療従事者法（The Health Personnel Act）の第48条によって規定されている（Government Administration Service, Norwegian

表1 オスロ大学の心理学科における心理士養成課程（6年制の新教育課程）

12 セメスター	臨床実習		論文指導		課題研究
11 セメスター	臨床実習	論文指導		心理専門職の責務と倫理	課題研究
10 セメスター	基礎実習				
9 セメスター	子どもの問題の理解と治療		教育心理 カウンセリング	予備実習 (子ども対象)	家族システムの 心理臨床
8 セメスター	心理療法と臨床研究			成人の心理療法	精神医学・ 精神薬理学・ 臨床神経心理学
7 セメスター	人格心理学	心理査定法		予備実習 (成人対象・ 対人関係スキル)	課題研究 (パーソナリティ)
6 セメスター	応用社会心理学	心理学基礎論	集団マネジメント	質的研究法Ⅱ	課題研究 (社会心理学)
5 セメスター	発達心理学		コミュニケーションと学習	乳幼児検査法・ 観察法	質的研究法・ 課題研究入門
4 セメスター	認知神経科学	神経心理学的 検査法	質的研究法Ⅰ	心理実験法Ⅱ	課題研究 (認知・神経心理学)
3 セメスター	認知心理学	神経生物学・神経解剖学		応用認知心理学	質的研究法Ⅰ
2 セメスター	社会心理学・人格心理学入門	心理専門職概論	心理学と科学	心理学研究法入門	
1 セメスター	科学哲学入門	一般心理学入門			
	10 単位		10 単位		10 単位

※ オスロ大学ウェブサイトに基づき作成。ノルウェー語からの翻訳は筆者による。

Government, 2008)。すなわち、その第2項aにおいて、ノルウェーの大学にて、関連する科目の試験に合格した者に資格を付与することが記されている。同じ項のcでは75歳という年齢制限も記されている。

筆者の知人が言うには、この国家資格である心理士を取得すると、初任給は安いものの、必ず定職に就くことができるという。卒業後の就職が保証されているがゆえに、心理学科が医学部と同等の人気と難易度を有しているのだろう。これはわが国の心理学をめぐる状況とは大きな違いである。

なお、海外からの人材にも資格を付与することができるようで、医療従事者法の第48条の第3項aにおいて、「ノルウェーの試験と同等と認められる試験に合格した者」という規定もあり、他のヨーロッパ諸国で同様の心理学教育課程を修了した者に資格を与えることができるのだろう。このような人材の流動性の問題に関連して、ヨーロッパで心理学の共通資格を作ろうとする動きがあり、現在はその試験的实施が行われている。その共通資格について、次節で述べることにしたい。

### 3.4. ヨーロッパ諸国間に共通の心理学資格 (EuroPsy)<sup>注8)</sup>

ノルウェーの心理士資格に関連して、ヨーロッパ諸国における共通資格 (EuroPsy) の構想についても言及しておきたい。ヨーロッパ各国の心理学会の連合体である「ヨーロッパ心理学会連合」 (European Federation of Psychologists' Association, EFPA) には現在、34の学会が参加しており、その構成員の数は20万人に

も及ぶという。このEFPAでは、ヨーロッパの加盟国全体で通用する共通資格制度の設立を準備している。この制度は、ヨーロッパ共通心理学免許 (the European Certificate of Psychology, EuroPsy) と呼ばれている。この資格制度は、EFPAが2001年に承認した「ヨーロッパ心理士教育訓練要綱」 (A framework for education and training of psychologists in Europe, EuroPsyT) を基礎としている。EuroPsyは、2008年12月現在、EFPA加盟国中、フィンランド、ドイツ、ハンガリー、イタリア、スペイン、イギリスの6カ国にて試験的に実施されている。この試行期間は、2009年夏までとされている。このEuroPsy制度の下では、2種類の資格制度が計画されている。学部以後の教育水準を第1から第3段階までに分け、第1段階が学部卒、第2段階が修士課程修了にそれぞれ相当し、第2段階を修了することで基礎資格を得ることができる。さらに第3段階では、修士以後にスーパーヴィジョンを受けながら実務を経験することが求められる。将来的には、第3段階を修了した者に与える上位資格を設ける構想である。

EuroPsy制度の設立の目的は、欧州連合 (EU) 加盟諸国間で、専門職の人材の流動性を高めることにある。これは、先に述べた1999年のボローニャ・プロセスとも深く関連しており、高等教育修了者のキャリアパス形成という観点から見れば、ボローニャ・プロセスの延長上に位置づけることも可能であるだろう。

EuroPsyの基礎資格に関連した第1段階のカリキュラムについては、臨床心理学に

ノルウェーの心理士養成課程

偏らず、幅広い領域の心理学理論を学ぶものとなっている(表2)。例えば、心理学の理論的知識を学ぶ授業科目として、一般心理学 (General psychology), 神経心理学 (Neuro-psychology), 心理生物学 (Psychobiology), 認知心理学 (Cognitive psychology), 差異心理学 (Differential psychology), 社会心理学 (Social psychology), 発達心理学 (Developmental psychology),

表2 EuroPsy養成課程における第1段階(学士レベル)の概要 (EFPAによるEuroPsyパンフレットより)

授業内容(授業目標)	科目名	単位数(ECTS)	
導入教育(知識習得)	心理学研究法	指定なし	125以上
	心理学史		
	心理学の研究領域に関する概説		
人間行動の説明に関する理論(知識習得)	一般心理学	個人・個体に関する内容が60以上、集団20以上、社会20以上	125以上
	神経心理学		
	心理生物学		
	認知心理学		
	差異心理学		
	社会心理学		
	発達心理学		
	人格心理学		
	職業・組織心理学		
	臨床・健康心理学		
	教育心理学		
精神病理学			
技法に関する理論(知識習得)	データおよびテスト理論	指定なし	125以上
	質問紙理論		
	評価理論		
人間行動の説明に関する理論(技能習得)	アセスメント実習	指定なし	125以上
	面接実習		
技法に関する理論(技能習得)	検査および質問紙構成実習	指定なし	125以上
	集団面接実習		
学術的技能(技能習得)	情報収集と文献検索技術	指定なし	125以上
	文献の読み方と作文技術		
	倫理		
研究の方法論(知識習得)	研究法入門: 実験法	30以上	45以上
研究の方法論(技能習得)	質的・量的研究法		
	実験実習		
	研究法および統計実習		
	データ収集実習		
心理学以外の理論(知識習得)	質的分析	15以上	45以上
	認識論		
	哲学		
	社会学		
	人類学		
第1段階全体		180以上	



人格心理学 (Personality psychology), 職業・組織心理学 (Work and organizational psychology), 臨床および健康心理学 (Clinical and health psychology), 教育心理学 (Educational psychology), 精神病理学 (Psychopathology) が含まれており, この他にも研究法を学ぶための授業科目も設定されている。日本で言えば, 学士課程

表3 EuroPsy養成課程における第2段階 (修士レベル) の概要 (EFPAによるEuroPsyパンフレットより)

授業内容 (授業目標)	科目名	単位数 (ECTS)	
導入教育 (知識習得)	臨床実践の現場と専門領域の選択に関する概説	60以上 (そのうち社会に関連したものが30以上)	120以上
説明に関する理論 (知識習得)	一般心理学、心理生物学、発達心理学、人格心理学、および (または) 社会心理学に関する説明理論の授業 (例: 学習理論、認知構造理論、人格理論)		
	職業・組織心理学、教育心理学、臨床心理学、および (または) 心理学の下位領域に関する説明理論の授業 (例: 作業成績理論、状況的認知理論、リーダーシップ理論、人格障害理論)		
技法に関する理論 (知識習得)	一般心理学、心理生物学、発達心理学、人格心理学、および (または) 社会心理学に関する技法理論の授業 (例: 心理測定法、脳波判定の理論)		
	職業・組織心理学、教育心理学、臨床心理学、および (または) 心理学の下位領域に関する技法理論の授業 (例: 作業分析に関する理論、学習ニーズの分析、カウンセリングと心理療法の理論)		
説明に関する理論 (技能習得)	上述の説明理論を研究ないし実験室場面でのアセスメントに応用する実習 (例: EMG測定の実習、人格アセスメントの実習)		
	上述の説明理論を応用的ないしフィールド場面でのアセスメントに応用する実習 (例: EMG測定の実習、人格アセスメントの実習)		
技法に関する理論 (技能習得)	上述の技法理論を研究ないし実験室場面での介入に応用する実習 (例: 検査の構成、学習実験のデザインに関する実習)		
	上述の技法理論を応用的ないしフィールド場面での介入に応用する実習 (例: 成績評価システムのデザイン、訓練システムのデザイン、治療計画の作成、心理療法に関する実習)		
方法論 (知識習得)	研究計画法 (上級)		
	多変量統計 (分散分析、重回帰分析、因子分析を含む)		
	質的研究法 (面接法と合わせて、質問紙法と質的データ分析の利用を含む)		
方法論 (技能習得)	上述の方法論と技法に関する実習		
研究および心理職共通の技法 (技法習得)	報告書と論文の執筆に関する実習		
	面接法に関する実習		
心理学以外の理論 (知識習得)	心理学以外の領域に含まれる、心理職の業務において重要なテーマに関する理論的、実践的授業 (医学、法律、経営経済学)		
基礎能力	課題研究	15~30	
基礎能力	インターンシップ	15~30	
第2段階合計		120以上	

## ノルウェーの心理士養成課程

に相当するこの段階は、180単位以上を取得することで修了できる。全体としてみれば、心理学の一部の領域に偏ることなく、基礎領域から応用領域に至るまで、幅広く学習することが求められる内容である。

次いで、修士課程に相当する第2段階である(表3)。この課程を概観すると、EuroPsy資格を目指す学生には、臨床実践のための技術を習得するだけでなく、心理学を総合的に理解し、人間行動を多角的かつ科学的に吟味するための知識と技能を学ぶことが必要であるとの明確なメッセージを読み取ることができるように筆者には思われる。これは言い換えれば、心理臨床家としてだけでなく、心理学研究者としての基礎も身につけなくてはならないということであるだろう。筆者がそのように思うのは、この修士レベルにおいてさえも、心理学の理論を、一般心理学や心理生物学も含め、幅広く学ぶことが期待されていることに加えて、技法関連の授業内容を見ても、その具体例として、脳波の判読に関する学習や、EMG測定トレーニングが含まれているためである。筆者は精神生理学も多少かじってきたけれども、臨床資格の養成課程の中で、生理指標の測定法や分析法が、その授業内容の代表例として掲げられていることに強く驚かされた。また、研究論文の作成が必修化されていることも、この教育課程で、研究者としての資質を高めることが強く期待されていることを裏づけているだろう。

上述のように、科学的心理学の基本的資質を重視するカリキュラムであることに加えて、EuroPsy資格に直結する第2段階で

は、当然ながら、心理職の業務に必要な実践的内容が、比較的多く含まれている。これに先行する第1段階では、上述のように、心理学を幅広く学ぶものになっていた一方で、第2段階では、臨床的技法の習得が重視されていることは疑いない。この第2段階で120単位を修得することで、修士課程に相当する課程を修了し、EuroPsy資格を取得できる。しかしながら、このEuroPsy資格は、あくまで基礎資格として位置づけられていることに留意すべきである。その上位資格がいずれは準備されるようであり、これを得るためには、さらに第3段階へと進むことが求められている。この第3段階は、スーパーヴィジョンの指導下での実務経験を1年間積むことが求められる。これはETCSで60単位に相当する。

ノルウェーも、このEuroPsyに関する協議に、その代表者が参加しており、将来的にはこの共通資格制度に対応できるカリキュラム編成を行っていくことになるだろう。オスロ大学のウェブサイトからダウンロードできる文書に「オスロ大学社会科学部における心理職養成課程の新設について」と題されたものがある(University of Oslo, 2006)。この文書には、この新しい養成課程が、ノルウェー国内の心理士だけでなく、EuroPsy資格の倫理規程に従うものであることが明記されている。そのため、この新設された課程は、将来的には、EuroPsy資格を取得できるものとなる可能性が高いと思われる。しかしながら、表1のオスロ大学のカリキュラムを見ると、EuroPsyの第2段階に相当する第7セメスター以後の高学年における学習内容が、臨

床心理学に深く関わる内容だけに限定されている印象を受ける。ここには心理生物学などの基礎領域に関連した学習内容が含まれておらず(少なくとも明示されておらず), その点で, 将来的に若干の修正が必要になるかもしれない。

このEuroPsy資格の利用が, ヨーロッパの多くの国々で始まり, 資格取得者が増加していくことによって, ヨーロッパ圏における人材の流動性が高まれば, その人材を養成する機能を担う加盟諸国の大学の間で教育の質が問われることとなるだろう。国内の心理専門職だけでなく, 他国の人材との間で競合関係に置かれることを意味しており, オスロ大学を卒業した心理士の有資格者が就職に困らないという現状が, この先どれだけ続くのかは不透明であると言えよう。

実は, EFPAの前理事長の見解(Tikkanen, 2004)によれば, このEuroPsy制度は, 最終的に, きわめてグローバルな資格となることを目指しているらしい。この見解の中には, この資格制度がヨーロッパ地域に限定されない可能性があるとのコメントが含まれており, ヨーロッパ地域にとどまらず, アメリカやアジアなどの他地域も視野に入れた, きわめてグローバルな資格として機能することを想定しているかもしれない。この資格制度が本格的に動き出したとき, わが国の心理学領域にも, 何らかの影響が及ぶ可能性はあるのだろうか。

ヨーロッパ地域など, 外国の出身者が, わが国の臨床心理専門職に従事するには, HallとLund(2005)が指摘しているように, 特に, 言語の問題が大きな障害となる。し

たがって, ヨーロッパの教育機関で, 日本語教育の制度がよほど充実しないかぎり, わが国の心理職に, 海外出身の人材が流入するということは, 決して多くないだろうと予想できる。しかしながら, 可能性はまだ低いかもしれないけれども, ある程度まとまった数の国内の人材が, ヨーロッパの大学で所定の課程を修了してEuroPsy資格を取得し, 日本に帰国して心理職を求めるような動きが出てくれば, ヨーロッパの教育課程と, 日本国内の教育課程との間で, 教育内容および修得技術の優劣が比較されることにもなりかねないだろう。そのように考えれば, 遠い将来, EuroPsyを「対岸の火事」として傍観していられなくなるかもしれない。わが国の心理資格制度が, ヨーロッパからの「黒船」に脅かされることは将来あるだろうか。

以上の議論の中で, ノルウェーの心理士の資格制度, ならびにヨーロッパの共通資格構想の現状について紹介した。次章では, わが国の資格制度の中で, これらの資格制度に関連が深いと思われるものをいくつか紹介する。そして, これらの資格制度との比較に基づいて, ノルウェーの資格制度の特徴をあらためて考察したい。

## 4. わが国の制度との比較

### 4.1. 認定心理士制度

#### 資格制度の概要

わが国には, 国家の法制度で規定された心理学の資格制度が, 現時点で存在しない。その意味で, 法制度で規定され, 保護されたノルウェーの心理士資格制度は, わが国

## ノルウェーの心理士養成課程

の資格制度の枠組みと大きく異なっていると指摘できる。

国資格はないものの、複数の団体が、心理学関連の資格を認定している。その資格を網羅的に述べることはせず、資格取得者数などの点から見て、代表的と考えられる2つの資格制度と、日本学術会議から最近になって提案された制度案について紹介するにとどめる。

わが国の資格制度の中で、認定心理士は、社団法人日本心理学会の認定する心理学資格である。2007年8月時点で、その取得者は21,000名を超えている（日本心理学会, 2007）。取得者数という点から見ても、非常に規模が大きく、わが国の心理学における代表的資格のひとつであると言えるだろう。日本心理学会は、この認定心理士について「心理学の専門家として仕事をするために必要な、最小限の標準的基礎学力と技能を修得していること」を認める資格であると説明している。このことから明らかなように、この認定心理士のカリキュラムは、あくまで必要最低限の教育課程である。したがって、個々の大学での特色を打ち出すためには、このミニマム・スタンダードの上に、新たな科目を配置するなどの処置が必要であるし、そうした差別化を図っていくことが、学生募集などの観点からも、実際に望まれるのであろう。

また、日本心理学会が発行している資格取得のための手引き（2007）でも説明されているとおり、「資格の取得に伴い直接的な権益が直ちに得られる」わけではない。そのこともあって、心理学科や心理学専攻といった心理学を専門に学ぶ課程の卒業生

にとっては、この資格を取得することによって多大な利点はないという問題も指摘されている。

その一方で、「大学における心理学関係の学科名が学際性を帯びてきて、必ずしも『心理学』という、直接的名称が使われていない場合が多い」（日本心理学会, 2007）という現状がある。さらには、医療、健康や福祉といった、心理学以外の名称を冠した学部学科で、多くの心理学の単位を履修できるケースもある。そうした学部学科の卒業生が、履歴書等の公的な書類上で、大学教育にて心理学を専攻したことを証明する方法として、認定心理士の取得は有効である。大学をめぐる昨今の情勢は、少子化による受験生の減少を始めとして、厳しいものになっている場合が少なくない。受験生獲得に向けて、学部学科の再編が多くの大学で行われ、上述のように、心理学系のカリキュラムが学際的な学部学科に組み込まれることが今後も続くと思われる。そうした情勢にあっては、心理学カリキュラムの必要最低限の内容を確保し、心理学の学部教育課程を修了したことを明示するための資格制度が不可欠となる。その役割を、認定心理士制度が引き続き担ってくれるものと筆者は期待している。

心理学教育が、他系統の学部学科の教育課程に組み込まれることについては、賛否両論がありうるかもしれない。しかしながら、心理学は、その純粹さを保つことよりはむしろ、われわれ人間の実生活にいかに応用できるかによって、その真価が最終的に問われると筆者は考えている。そうした見地からすれば、上述のような近年の動き

は、医療や福祉といった近接領域との教育研究における連携関係を強化し、心理学の応用的志向性を高めることにつながると期待できる。こうした状況は、一般社会に心理学が貢献する機会を増大させることにもつながり、心理学関係者にとっては大いに歓迎すべきことではないだろうか。そして、認定心理士制度には、今後とも、こうした動きを促す役割と合わせて、他系統との融合的教育課程の中で、心理学教育における必要最低限の内容を保証できる役割を、引き続き果たしてほしいと希望する。

その教育課程の内容について概観してみよう。その概略は表4に示すとおりである。この表の中には、筆者の所属学科（医療福祉学部 保健福祉学科 福祉心理領域）における開講科目との対応も示した。認定心理士制度の指定科目は、大きく基礎科目と選択科目の2群に分かれ、さらに、それぞれが複数の科目群に分けられる。この教育課程の特徴は、概論だけでなく、研究法ならびに実験実習を必修として、心理学教育の根幹に位置づけている点である。したがって、科学的なデータ収集の手法を習得することを重要視した教育課程であるとみなすことができるだろう。

#### オスロ大学のカリキュラムとの比較

この認定心理士の要件と、オスロ大学の教育課程とを比較してみよう。第一に、その全体的な枠組みの違いとして、認定心理士制度が4年制大学の卒業生、すなわち学士課程の修了者を対象としたものであるのに対して、オスロ大学のカリキュラムは大学入学以後6年間一貫の教育課程であると

いう大きな差異がある。

また、基礎領域に関する科目の扱いについて、明らかな相違があるように思われる。上述の認定心理士に関する取得要件を参照するかぎりでは、この認定心理士制度が、心理学の基礎教育をそれなりに重視した資格であるという印象を受ける。例えば、実験実習を必修化しているという点で、科学的なデータ収集の技法を習得することを重視している。

だが、その一方で、この認定心理士制度の枠組みでは、心理学の専門科目の学習に偏りが生じる恐れがある。つまり、DからHまでの5つの選択科目群のうち、3つについてだけ単位を取得することでも、制度上は資格取得が可能である。例えば、認知心理学、学習心理学、生理心理学や神経心理学といった、人間の意識や行動の基本的性質、ならびに意識や行動の生理学的基礎を学ぶための基礎領域の科目を履修せずに、認定心理士を取得することも起こりうる。こうした講義科目をまったく履修せずに、他の選択科目群（F～H）の科目を一定の数だけ履修することで、認定心理士資格を取得することが制度上は可能だからである。

これに対して、オスロ大学のカリキュラムは、2年目、すなわち第3および第4セメスターに、実験実習に関連した科目として「心理実験法Ⅱ」や「課題研究（認知・神経心理学）」が配置されるだけでなく、上述のように、認知心理学に関連した科目や、行動の生理学的基礎に関連した科目を集中的に学ぶシステムを採用している。したがって、このオスロ大学のカリキュラムは、認定心理士の要件に比べて、実験実習だけ

ノルウェーの心理士養成課程

表4 認定心理士資格取得のための指定科目（日本心理学会）と履修カリキュラムの例  
（東北文化学園大学医療福祉学部）

科目群	資格認定委員会の定める授業科目		東北文化学園大学（福祉心理領域）の授業科目	
	科目名	単位数	科目名	単位数
基礎科目	A	心理学概論	心理学（基礎科目）	2
			福祉心理学概論	2(1)
	B	心理学研究法	心理学研究法Ⅰ	2
			心理学研究法Ⅱ	2
			人格診断法	2
	C	心理学実験	心理学基礎実験Ⅰ	2
心理学基礎実験Ⅱ			1	
基礎科目小計		12以上	13(12)	
選択科目	D	知覚心理学 学習心理学	学習心理学	2
			認知心理学	2
	E	生理心理学 比較心理学	神経心理学	2
	F	教育心理学 発達心理学	生涯発達心理学Ⅰ	2
			生涯発達心理学Ⅱ	2
	G	臨床心理学 人格心理学	人格心理学	2
			障害者心理学	2
			臨床心理学	2
			カウンセリング	2
			非行心理学	2
	福祉心理学特論	2		
	H	社会心理学 産業心理学	社会心理学	2
	選択科目小計※		16以上	24
その他の科目	I	心理学関連科目 卒業論文 卒業研究	卒業研究	6(4)
		その他の科目小計	6(4)	
合計		36以上	43(40)	

※認定心理士の指定科目については日本心理学会認定心理士資格認定委員会（2007）に基づいて作成。

※東北文化学園大学の授業科目については、同大学の平成20年度学生便覧に基づき作成。

※（）内の数字は、資格申請時に認定委員会で認められる単位数が、大学で指定した単位数より少ない場合の認定単位数である（副次主題として扱われる場合など）。

※D～Hの5領域中、3領域以上の領域で4単位以上を取得する。

でなく、心理学の基礎的な研究領域の授業科目も含め、認定心理士のDからHの選択科目の全体を幅広く学ぶことを要求した内容であると結論できる。オスロ大学の教育課程では、臨床心理学の専門教育に入る前の段階において、上述のような心理学の基礎領域の学習を必須としている点で、こうした基礎領域に関する知識の習得を、きわめて重視するものであると言えよう。

## 4.2. 臨床心理士制度

### 資格制度の概要

わが国の「臨床心理士」制度は、文部科学省の認可する財団法人日本臨床心理士資格認定協会が、所定の試験の合格者に対して与える資格である。昭和63年より資格の認定を開始し、本年で20年が経過した。2008年7月の段階で、18,251名に資格が与えられてきた(藤原, 2008)。以前には現職者等に対する経過措置が行われていた一方、平成19年からはその措置も終了し、医師等を除き、指定大学院または専門職大学院の修了が必要となった。その指定大学院は、2008年7月現在で156校あり、そのうちの22校は第2種指定である。また、臨床心理士を養成する専門職大学院は4校ある。臨床心理士資格を取得するための指定科目と、指定大学院のひとつである東北大学大学院教育学研究科 総合教育科学専攻(臨床心理研究コース)における開講科目とを示した(表5)。

### オスロ大学のカリキュラムとの比較

全体的な枠組みを比較すると、臨床心理士制度では、学部レベルでの心理学教育を

資格取得の要件としておらず、そのため、大学院の修士課程で2年間だけ心理学を学んだ者が、この資格を取得することも制度上は可能である。これに対して、オスロ大学では、大学入学から6年間の一貫したカリキュラムを採用している。オスロ大学の教育課程の修了者には国資格が与えられるという点も、わが国の臨床心理士制度と大きく異なっている。

また、臨床心理士の制度自体は、修士論文を必修としていないのに対して、オスロ大学では研究論文を必修にしていることも特徴と言えるかもしれない。オスロ大学の教育課程は、学士課程での教育内容と連動して、研究を実施するための基礎能力を養うことを重視していると思われる。

他方、東北大学とオスロ大学のカリキュラム内容を比較してみると、いずれの大学でも研究論文が必須科目として配置されている点で類似している。これに関連して、EuroPsy制度でも、修士レベルでの研究論文が必須になっている。これは東北大学の研究重視の傾向がカリキュラムに反映された結果、オスロ大学に類似したものになったということであろう。

## 4.3. 職能心理士制度案

### 資格制度案の概要

職能心理士の制度案は、日本学術会議の2つの分科会から提起されたものである。2008年4月には、学術会議の心理学・教育学委員会の中の、心理学教育プログラム検討分科会と、健康・医療と心理学分科会という2つの分科会から、「学士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確

表5 臨床心理士資格取得のための指定科目(資格認定協会)と実際のカリキュラム例(東北大学)

科目群	資格認定協会の指定した科目		東北大学教育学研究科の授業科目				
	科目名	単位数	科目名	単位数			
必修科目	臨床心理学特論	4	臨床心理学特論Ⅰ 臨床心理学特論Ⅱ	2 2			
	臨床心理面接特論	4	臨床心理面接特論Ⅰ 臨床心理面接特論Ⅱ	2 2			
	臨床心理査定演習	4	臨床心理査定演習Ⅰ 臨床心理査定演習Ⅱ	2 2			
	臨床心理基礎実習	2	臨床心理基礎実習	2			
	臨床心理実習	2	臨床心理実習	2			
	必修科目小計	16	必修科目小計	16			
選択必修科目	A群	心理学研究法特論	2	心理学研究法特論	2		
		心理統計法特論					
		臨床心理学研究法特論		臨床心理学研究法特論Ⅰ 臨床心理学研究法特論Ⅱ	2 2		
	B群	人格心理学特論	2				
		発達心理学特論		発達心理学特論Ⅰ 発達心理学特論Ⅱ 発達心理学特論Ⅲ 発達臨床論Ⅰ 発達臨床論Ⅱ	2 2 2 2 2		
		学習心理学特論		学習心理学特論Ⅰ	2		
		認知心理学特論					
		比較行動学特論					
		教育心理学特論		教育心理学特論Ⅰ 教育心理学特論Ⅱ	2 2		
		社会心理学特論		社会心理学特論	2		
	C群	人間関係学特論	2				
		社会病理学特論		社会病理学特論	2		
		家族心理学特論		家族心理学特論	2		
		犯罪心理学特論					
		臨床心理関連行政論					
	D群	精神医学特論	2	学校精神医学特論	2		
		心身医学特論					
		神経生理学特論					
		老年心理学特論					
		障害者(児)心理学特論		障害者心理学特論 障害者生理学・病理学特論 知的障害者心理学研究 コミュニケーション障害学特論 学習障害特論 軽度発達障害者心理学研究Ⅰ 軽度発達障害者心理学研究Ⅱ	2 2 2 2 2 2 2		
		精神薬理学特論					
		E群		投影法特論	2	投影法特論	2
				心理療法特論		心理療法特論Ⅰ 心理療法特論Ⅱ	2 2
				学校臨床心理学特論		学校臨床心理学特論	2
				グループ・アプローチ特論		コミュニティ心理学特論	2
	臨床心理地域援助特論						
	選択必修科目小計	10					
その他			課題研究	8			
	全科目合計	26					

※藤原(2008)および東北大学大学院教育学研究科 学生便覧(平成20年度)に基づき作成



立に向けて」と題された対外報告が発表された（日本学術会議 心理学・教育学委員会 心理学教育プログラム検討分科会ならびに心理学・教育学委員会 健康・医療と心理学分科会, 2008）。さらに同年8月には、健康・医療と心理学分科会より、「医療領域に従事する『職能心理士（医療心理）』の国家資格法制の確立を」と題された提言が発表された（日本学術会議 心理学・教育学委員会 健康・医療と心理学分科会, 2008）。いずれについても、現時点では制度案であって、法制度としての実現には至っていない。

前者の対外報告では、心理学の専門職に関連した法制度が整備されておらず、従事者の待遇が不十分であるために、心理学を専攻する学生に明確なキャリアパスが見当たらず、心理学の学部教育の専門性を活かす道が少ないこと、特定の領域に偏った教員組織編成による弊害が出ていること、学部レベルの基礎教育を受けずに心理専門職に就く者が少なくないことといった問題が指摘されている。そして、その解決策として、基礎教育の徹底強化と、心理学資格の法制化によるキャリアパス確立を訴えている。これに関連して、基礎教育のための「基準カリキュラム」を示すとともに、資格制度の案として、「職能心理士」という統一名称の下に、専門領域ごとに下位区分を設けて、「職能心理士（医療心理）」のように表記しようというのである。学士課程の修了者を「職能心理士補」とし、さらに2年間の実務経験の後に国家試験を受けて、「職能心理士」資格を取得できる。

次いで、後者の提言では、その「職能心理士（医療心理）」の養成カリキュラムとと

もに、その国家資格取得へのプロセスを提案している。この提言では、医療領域に従事する心理技術者のニーズが高いにもかかわらず、彼らの収入の水準からみて、その待遇は概して低く抑えられていることや、過去の厚生省による一連のプロジェクトが、心理技術者の国家資格が必要であるという結論を出していたにもかかわらず、その国家資格化がいまだに実現していないといった現状認識に基づいている。この中で示されている養成カリキュラムを表6に示す。

このカリキュラムの特徴としては、心理統計法を基礎科目として明示している点が認定心理士のカリキュラムと異なっており、後者以上に研究方法論の習得を重視した内容になっているとの印象を受ける。また、認知心理学のような心理学の基礎領域の科目を含めており、心理学を基礎から応用まで幅広く学ばせるものとなっている。行動心理学が、具体的にどのような内容を含むものとして想定されているのか判然としなけれども、学習理論などの行動の基礎過程を扱うのであれば、これも心理学の基礎領域の教育を充実させるものとして評価できるだろう。

### オスロ大学のカリキュラムとの比較

この資格制度が実現すれば、わが国の心理学領域における最初の国資格が誕生することを意味している。国家の法制度で保護されるという意味では、オスロ大学の教育課程修了者に与えられる心理士資格と同等ということになるだろう。しかしながら、オスロ大学の課程が6年制の一貫教育であるのに対して、職能心理士案の中のカリ

表6 職能心理士（医療心理）の養成教育カリキュラム案

科目種	大項目科目	中項目科目	単位数
心理学専門科目	心理学基礎論	心理学概論	2
		心理学研究法	2
		心理統計学基礎	4
		心理学基礎実験	4
	心理学特論	知覚心理学	2
		認知心理学	2
		行動心理学	2
		教育心理学	2
		発達心理学	2
		感情心理学	2
		神経心理学	2
		個性心理学	2
		社会心理学	2
		健康心理学	2
職能別専門科目 (臨床心理)	臨床心理学	臨床心理学概論	2
		心理療法概論	2
		家族心理学	2
		犯罪心理学	2
職能別専門科目 (医療心理)	医療臨床心理	臨床心理実務倫理論	2
		心理面接法	2
		心理アセスメント基礎	2
		心理療法基礎実習	2
		医療心理実地実習	5
		チーム医療・福祉・介護組織論	2
職能別専門科目 (医療心理周辺科目)	医学序論	医学序論	4
	精神保健学	精神保健学	4
	地域保健福祉論	地域保健福祉論	4
	障害者支援論	障害者支援論	2
心理学専門科目	心理学卒業論文	心理学卒業論文	6

※日本学術会議「健康・医療と心理学分科会」（2008）に基づき作成。

キュラムは、あくまで学士課程を中心にした内容となっている。そのため、カリキュラム全体の単純比較は難しい。ここでは、オスロ大学の学士レベルの教育課程（前半3年）と職能心理士のカリキュラムとを比較してみよう。

両者に共通しているのは、臨床心理学の専門職を養成する課程ではあるものの、データ収集の方法論を習得させる科目が必修化されているという点である。他方、心理学の専門領域、特に基礎領域の学習範囲に、若干の違いがあるとの印象も受ける。

オスロ大学の学士レベルの教育課程の中で、2年次において、認知過程に関する内容と、行動の生物学的基礎に関する内容とを中心に構成されていることをすでに述べた。表1を見たかぎりでは、この2つの領域のバランスがうまくとれているように思われる。他方、職能心理士のカリキュラムでは、認知過程に関する科目が、「知覚心理学」と「認知心理学」の2科目が用意されているのに対して、人間行動の生物学的基礎に関連した科目が、「神経心理学」しか見当たらない。その意味で、心理学の基礎領域に関する科目配置としては、オスロ大学の教育課程のほうが、行動の生物学的基礎に関する教育を重視しているという印象を受ける。こうした科目を配置することは、特に医療心理という文脈では重要であるように思われる。その重要性は、心身症の患者のように、心身の相互関係の問題が主である場合は言うまでもないだろう。さらに、精神疾患と合わせて、他の身体疾患でも同時に治療を受けているような患者のアセスメントや治療に関わる場合にも、心身の関

係性について深く理解しておくことが求められるだろう。

## 5. おわりに

以上の議論の中では、オスロ大学のカリキュラムを紹介し、本邦における心理学の代表的な資格制度や、それに準拠した大学の教育課程との比較を行ってきた。この作業を通して明らかになったこととして、特に筆者が指摘したいのは、オスロ大学のカリキュラムが、臨床的な資格を付与するものでありながら、心理学の基礎領域、中でも特に、心理的機能の生理・生物学的基礎を重視したものになっているという事実である。本論の冒頭で、筆者の知り合いの研究者との対話を紹介した。この対話の中で彼が言っていたように、オスロ大学の心理士養成課程の中では、心理学の基礎領域と臨床領域とを差別化して、一方に偏った科目配置をするようなことは事実上ないようだ。この6年制教育課程の学生が、研究論文のテーマとして、ADHDの動物モデルの実験を選択していたことも、こうした事情を踏まえれば、筆者には納得できるように思われる。

本論での議論をまとめると、わが国の資格制度ならびに養成カリキュラムの要件との比較から、オスロ大学のカリキュラムの特徴として、次のようなことが言えるだろう。

- 1) 課程修了後に、国家の法制度で規定された国資格を取得できる。
- 2) 6年間の一貫した教育課程である。
- 3) 認定心理士制度との比較では、心理学の諸領域についての内容を幅広く学ぶこと

## ノルウェーの心理士養成課程

を要求するものになっていることを指摘できた。特に注目すべき点は、臨床心理学の専門科目を学ぶより先に、2年次において、認知過程に関する授業科目や、行動の生物学的基礎に関する科目を集中的に学ばせるということであった。

4) 臨床心理士制度との比較では、最終年度に研究論文を課している点が特徴であると考えられた。

冒頭で紹介した研究員の男性は、このオスロ大学における6年間の教育課程の修了者でもあるのだが、彼によれば、この課程を修了することで、ほぼ確実に常勤の心理職に就職できるとのことで、まことに羨ましい状況である。また、オスロ大学医学部の、ある教授によると、ここで紹介した心理士養成課程は、医学部と同程度に学生に人気があるとともに、医学部と同程度に高い学業成績が要求されるとのことで、良好な就職状況を考えれば、そうした人気の高さにも納得できる。

だが、こうした状況が、今後長く続かない可能性もあるだろう。ボローニャ・プロセスに関連して、EU関係国全体での専門職人材の流動性を高めようとする動きが高まり、心理学の専門職についても、EFPAの主導で、EuroPsy資格の試験的登録が一部の国で開始された。心理職人材の国際的な流動性が高まることに伴う競争原理の導入が、今後のノルウェーの心理士養成と、オスロ大学卒業生の就職とに大きな影響を与える可能性があるだろう。

これに加えて、本論の前半で述べたとおり、ノルウェーの国家財政は、石油産業か

らの収入に大きく依存している。将来、石油の産出が減少したときに、心理士の資格制度を含め、ノルウェーの医療や福祉の国家的制度が維持できるのだろうか。ノルウェーの心理士養成制度は、遠からず大きな試練に直面することが予想される。

本論を締めくくるにあたり、筆者自身のことを少しだけ述べさせていただきたい。筆者は、心理学の基礎領域、特に生理心理学を専門にしており、動物実験などの基礎研究を中心に行ってきた。その一方で、リラクゼーション中の心身の状態の変化、脳波バイオフィードバックによる認知機能の向上、夜間睡眠（特に入眠）を規定する行動的因子、発達障害児のオペラント条件づけといった、臨床的な問題に関連の深い研究課題にも取り組んできた。

これは第一には、筆者の恩師の一人である丸山欣哉先生からの「基礎と応用の二本立てでやれ」というご指導に従った結果である<sup>29)</sup>。それと関連して、かつて筆者が大学院生だった折、ご指導いただいていた医学系の先生の中に、午前中には病院で診療をなさって、午後は動物実験施設で実験研究をなさるといふ先生がおられた。午前と午後のお仕事は密接に関係しており、動物実験では、診療科での治療の対象となる疾患の動物モデルを扱っておられた。診療活動と基礎研究とを有機的に関連づけながら、精力的にお仕事をなさっておられることに深い感銘を覚えた。こうした過去の経験があったために、筆者にとっては、冒頭で述べたオスロでの経験、すなわち臨床心理系の学生が動物実験を行って論文を書くとい

う事実が、とても強く印象づけられたのだらうと思う。

心理学の資格制度の新設や改編にあたっては、当然ながら、心理学の基礎領域の科目をどのように組み込むべきであるのかが議論されるべき問題であるだろう。そうした折に、基礎をきちんと学ぶことの意義をあらためて問いなおしていく作業も必要なのかもしれない。わが国の心理学をめぐる最近の情勢を考えれば、「基礎が大事」と主張しても、あまり耳を貸してもらえないかもしれない。このようなときこそ、基礎が大事であるとする根拠を、いかに明確に説明できるかが大切なのではないだろうか。筆者が関係する心理学の基礎領域について、臨床心理学を専攻する人にとっても学ぶ意義があると感じていただけるような研究の成果を、ごくわずかでも示すことができれば、筆者にとって、まことに幸いであると思う。今後も引き続き精進したい。

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、ノルウェーの心理士制度に関する情報を収集する上で、オスロ大学医学部教授Terje Sagvolden先生、同大学医学部研究員で、心理士 (psykolog) でもあるEspen B. Johansen先生、ならびにノルウェー心理学会副会長で、同学会の資格担当理事でもあるTove Mathiesen先生にご協力をいただいた。また、日本学術会議による職能心理士案の情報を収集する上では、東北大学大学院文学研究科教授の仁平義明先生に、東北大学大学院における臨床心理士養成のカリキュラムに関する情報を収集する上では、東北大学大学院教育

学研究科准教授、安保英勇先生のご協力を得た。東北文化学園大学医療福祉学部准教授の氏家靖浩先生からも、貴重なご意見を頂戴した。諸氏のご厚意に心より感謝申し上げる。また、2008年8月から9月にかけてのノルウェー渡航にあたり、ノルウェー学術会議 (Research Council of Norway, Japan-Norway Researcher mobility programme, FY2008) ならびに日本学術振興会 (国際交流事業・特定国派遣研究者) から旅費の補助を受けた。

## 注

- 1) 本論では、紙面の都合もあるので、科目の名称などに基づいて、カリキュラムの全体像を比較するにとどめ、科目内容の詳細に関する議論は、別な機会に行いたい。
- 2) 本節の記述について、特に引用を明示しない内容については、駐日ノルウェー王国大使館のウェブサイト(2008)、もしくはノルウェー外務省の資料 (ノルウェーデータ2008) に基づいている。
- 3) 現在、ノルウェーはEUに加盟しておらず、通貨もユーロではなく独自の通貨を使用している。その一方で、欧州経済領域 (EEA) 協定には参加して、EUの共同市場に参入している。
- 4) ノルウェーが石油で潤った70年代に、まったく対照的な状況であったのが同じ北欧のスウェーデンである。スウェーデンは北海油田の恩恵に与れなかったばかりでなく、70年代の石油価格の高騰や、国際的な不況の影響で、旧来からの鉄鋼業や造船業が衰退して、産業構造の転換

を迫られた。福祉国家建設を目指した社会民主党が76年の総選挙で敗北し、以後、失業や財政赤字といった経済問題に苦しむこととなる（百瀬他, 1998）。

5) 本項の記述は、特に引用を明示しないかぎり、熊野（1998）、熊野・牧野・菅原（1998）、村井・クリンゲ・本間（1998）、武田（1993）に基づいている。

6) 本節の記述内容については、特に引用を明示しないかぎり、オスロ大学のウェブサイト（2008）の記述に基づいている。

7) 本章の記述内容については、特に引用を明示しないかぎり、オスロ大学のウェブサイト（2008）の記述に基づいている。

8) 本節の記述内容については、特に引用を明示しないかぎり、EFPAのウェブサイト（2008）および、同サイトよりダウンロードできるブックレット（EFPA, 2006）の記述に基づいている。

9) 「基礎と応用で二股をかけて研究しろ！！」とおっしゃる丸山先生に対して、「それでは先生は何股かけておられるのですか」などと、たいへん失礼で愚かな問いを發した筆者（当時、大学院生）に対して、「おれはヤマタノオロチだ！！」といみじくも言われたことを筆者は忘れることができない。

## 引用文献

American Psychiatric Association

(2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed., text revision). Washington DC: Author.

European Federation of Psychologists'

Associations (EFPA) (2006). *Booklet on EuroPsy*. Website of EFPA

<<http://www.efpa.eu/europsy/booklet>> (2008年12月閲覧)

European Federation of Psychologists' Associations (EFPA) (2008). Website of EFPA

<<http://www.efpa.eu>> (2008年12月閲覧)

藤原勝紀 (2008). 専門教育, 資格試験, 専門業務. 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 (監修) 新・臨床心理士になるために (平成20年度版, pp. 11-43) 誠信書房

Government Administration Services, Norwegian Government (2008). The Health Personnel Act. Website of Norwegian Government

<<http://www.regjeringen.no/>> (2008年12月閲覧)

Hall, J. E., and Lunt, I. (2005). Global mobility for psychologists: The role of psychology organizations in the United States, Canada, Europe, and other regions. *American Psychologist*, 60, 712-726.

木戸 裕 (2008). ヨーロッパ高等教育の課題：ボローニャ・プロセスの進展状況を中心として レファレンス, 58, 5-27. 2008年8月

- 気象庁 (2008). 過去の気象データ 気象庁ウェブサイト  
 <<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>> (2008年12月閲覧)
- 熊野 聰 (1998). ヴァイキング時代 百瀬 宏・熊野 聰・村井誠人 (編) 北欧史 (pp. 25-37) 山川出版社
- 熊野 聰・牧野正憲・菅原邦城 (1998). カルマル連合の時代 百瀬 宏・熊野 聰・村井誠人 (編) 北欧史 (pp. 91-128) 山川出版社
- 松村 一 (1996). 捕鯨とノルウェー 百瀬 宏・村井誠人 (監修) 北欧 (p. 18) 新潮社
- 百瀬 宏 (1980). 北欧現代史 山川出版社
- 百瀬 宏・塩屋 保・村井誠人・大島美穂・吉武信彦・吉村博明 (1998). 現代世界のなかの北欧 百瀬 宏・熊野 聰・村井誠人 (編) 北欧史 (pp. 373-430) 山川出版社
- 村井誠人・マッティ＝クリンゲ・本間晴樹 (1998). ナショナリズムの時代 百瀬 宏・熊野 聰・村井誠人 (編) 北欧史 (pp. 186-245) 山川出版社
- 日本学術会議 心理学・教育学委員会 健康・医療と心理学分科会 (2008). 医療領域に従事する『職能心理士 (医療心理)』の国家資格法制の確立を (提言 2008年8月28日) 日本学術会議ウェブサイト
- <<http://www.scj.go.jp/ja/>> (2008年12月閲覧)
- 日本学術会議 心理学・教育学委員会 心理学教育プログラム検討分科会, 心理学・教育学委員会 健康・医療と心理学分科会 (2008). 学士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて (対外報告 2008年4月7日) 日本学術会議ウェブサイト  
 <<http://www.scj.go.jp/ja/>> (2008年12月閲覧)
- Nilsson, L.-G., Bundesen, C., Herlitz, A., Knorrning, A.-L. von, Lyytinen, H., Rosenberg, R., Saltokangas, R. K. R., & Tyrer, P. J. (2004). *Evaluation of clinical, epidemiological, public health, health-related and psychological research in Norway: Psychology and Psychiatry - Panel 3*. Website of The Research Council of Norway  
 <<http://www.forskningsradet.no/>> (2008年12月閲覧)
- ノルウェー外務省 (2008). ノルウェーデータ2008 Statistics Norwayウェブサイト  
 <[http://www.ssb.no/english/subjects/00/minifakta\\_en/jp/](http://www.ssb.no/english/subjects/00/minifakta_en/jp/)> (2008年12月 閲覧)
- 社団法人 日本心理学会 認定心理士資格認定委員会 (2007). 社団法人日本心理学

ノルウェーの心理士養成課程

会認定心理士資格申請の手引き（第4版）  
日本心理学会ウェブサイト  
<[http://www.psych.or.jp/n\\_about1/07.pdf](http://www.psych.or.jp/n_about1/07.pdf)>（2008年12月閲覧）

武田龍夫（1993）. 物語 北欧の歴史:モデル  
国家の形成 中公新書

Tikkanen, T. (2004). The European  
Diploma in Psychology (EuroPsy) and  
the future of the profession in Europe.  
Website of EFPA  
<[http://www.psychology-bg.org/rules/  
Status\\_o\\_profession\\_2003.pdf](http://www.psychology-bg.org/rules/Status_o_profession_2003.pdf)>（2008  
年12月閲覧）

駐日ノルウェー王国大使館（2008）. 駐日  
ノルウェー王国大使館ウェブサイト  
<<http://www.norway.or.jp/>>（2008年12  
月閲覧）

上掛利博（1999）. ノルウェー社会と高齢  
者福祉 仲村優一・一番ヶ瀬 康子（編集  
委員代表）世界の社会福祉:デンマーク・  
ノルウェー（pp. 263-298） 旬報社

University of Oslo (2006).  
Ny programstruktur for  
profesjonsprogrammet i psykologi ved  
Det samfunnsvitenskapelige fakultet,  
Universitetet i Oslo. Website of  
University of Oslo  
<[http://www.psykologi.uio.no/studier/  
evaluering/styredokument\\_endelig.  
doc](http://www.psykologi.uio.no/studier/evaluering/styredokument_endelig.doc)>（2008年12月閲覧）

University of Oslo (2008). Website of  
University of Oslo  
<<http://www.uio.no/english/>>（2008年  
11月閲覧）

吉武真理（1996）. 北海油田がもたらした  
豊かな恵みと問題点 百瀬 宏・村井誠人  
（監修）北欧（pp. 31-33） 新潮社

渡部真智（2006）. 石油埋蔵量の分布変化  
と石油戦略 金融市場 2006年10月号  
pp. 14-15.

財務省（2008）. 平成20年度一般会計歳入  
歳出の内訳 財務省ウェブサイト  
<[http://www.mof.go.jp/zaisei/  
con\\_02\\_g01.html](http://www.mof.go.jp/zaisei/con_02_g01.html)>（2008年12月閲覧）



## **Professional programs and qualifications in psychology available in the Kingdom of Norway**

### **— Focusing on the professional programs in psychology offered by the University of Oslo —**

Toshihiko SATO

Tohoku Bunka Gakuen University

This paper outlines the professional programs of psychology offered by the Department of Psychology of the University of Oslo (UiO) and the national qualification of “psychologist” awarded to a professional psychologist (“psykolog” in Norwegian) through the Act of July 2, 1999 No. 64 relating to Health Personnel etc. This Act legally defined the term, which is now thus protected by national law. The paper also deals with the plan for the European-level qualification of psychology (EuroPsy) that has already been accepted by the European Federation of Psychologists’ Associations (EFPA). In addition, the author compares the six-year professional psychology course offered by the UiO with the minimum requirements of two existing Japanese qualification systems as well as with the plan for a new qualification system that is under consideration in Japan. The details of the above are as follows: “JPA Certified Psychologist” issued by the Japanese Psychological Association (JPA), “Clinical Psychologist” certificated by the Japanese Certification Board for Clinical Psychologist, and a proposal from the Science Council of Japan for a qualification system protected by national law, the “Professional Psychologist” system. In the results, it was noticed that the study program offered by the UiO and the qualifications required by the same had the following three distinguishing characteristics: 1) The qualification of “psychologist” that the students receive on completion of the course is defined and protected by national law. 2) The professional program in psychology in UiO is a six-year program and includes psychological courses at both the bachelor’s and master’s levels. 3) In comparison to the abovementioned qualification systems available in Japan, it contains a relatively larger number of courses on some basic areas of psychology, especially the courses related to the biological background of human behavior. 4) Its curriculum of the last academic year includes a research thesis. Furthermore, the European-level qualification in Psychology—EuroPsy—has already been awarded on a trial basis and is in a consultation and experimental stage in some European countries, and graduates of professional programs of psychology in the UiO might also expect to be granted EuroPsy certificate, as well as receive the national qualification of psychologist, in the near future.

**Keywords:** psychologist, qualification, Norway, University of Oslo, EuroPsy